

平成 23 年度第 2 回洞天調査報告

王母洞・靈山洞(王屋山)および静應廟・木潤寺・修仙洞 (沁陽市)

鈴木健郎

1 調査日程・調査地・調査人員

洞天現地調査の一環として、2011 年 11 月 4 日に河南省済源市の王屋山の王母洞・靈山洞、翌 11 月 5 日に河南省沁陽市の静應廟(二仙廟・仙神廟)・木潤寺(勝果禅院)・修仙洞(二仙洞)および陽洛山の調査をおこなった。調査参加者は土屋昌明・鈴木健郎・森瑞枝の三名で、王母洞・靈山洞の調査では済源市文物管理局、静應廟・木潤寺・修仙洞の調査では沁陽市仙神谷風景区二仙廟管理处の任和平氏の協力を賜った。記して謝意を表する。日本出発から帰国までの日程は以下のとおりである。

11 月 3 日(木) 羽田→上海虹橋→鄭州(空路)、鄭州→済源(自動車移動)

11 月 4 日(金) 王母洞、靈山洞を調査(王屋山)、済源市文物管理局関係者と交流

11 月 5 日(土) 修仙洞、木潤寺、二仙廟(沁陽市)、陽洛山

11 月 6 日(日) 済源→鄭州(自動車移動)、鄭州→上海浦東→成田(空路)

2 本調査までの経緯

第一洞天である王屋山については、本調査以前にも現地を踏査した経験がある。2007 年、土屋昌明・鈴木健郎・森瑞枝の三名は陽台宮や紫微宮などを調査したあと天壇まで登った。濃霧のため天壇から広範囲の景観は観察できなかったが、晴れ間に天壇から北方向に遠望される山腹に洞窟らしいものが見えたため、同行の馮軍氏(済源市文物管理局)に質問したところ、そこに洞窟(=王母洞)が存在するとのことであった。翌日、小雨のなか王母洞のある山の入口までタクシーで行き、さらに通りがかりのトラクターに乗ってぬかるんだ山道を登り、王母洞に到達した。洞窟の下に廟が存在し、王母洞からは遠くまで広がる景観が望める地形であることは確認できたが、悪天候のため詳細は観察できなかった。洞窟内部にも立ち入ったが、10 メートルほど入ったところで洞窟が狭まり、その先は水没していたため、それ以上立ち入ることはできなかった。また、王母洞の山上にもう一つ別の靈山洞という洞窟があると知らされたが、雨天と時間不足のため調査することはできなかった。

2011 年 8 月には、土屋昌明・大形徹・山下一夫の三名が王屋山の調査をお

こなったが、雨天のため予定通りに調査することができなかった。天壇まで登ってから王母洞と靈山洞まで3時間縦走して地形を確認する予定であったが、雨天のため天壇に至るロープウェーが運転しておらず、時間と天候の制約から車で天壇山のふもとを調査するにとどまった。

3 王母洞・靈山洞の状況

前回までの経緯から、今回は好天の多い11月に調査日程を設定したが、またしても雨天となった。今回の調査スケジュールも非常にタイトで予備日がなく、雨はそれほど強くなかったため、済源市文物管理局の関係者と相談の上、調査を実施することになった。管理局から王母洞へ通じる山道の入口まで約1時間を車で移動し、そこから管理局手配のトラクターの荷台に載って山道を進んだ。



2007年の調査時に比べると山道はいくぶん拡張されていたものの、雨天が続いたため足場は非常に悪く、振動で荷台から振り落とされたりタイヤが轍からはずれてトラクターごと溪谷に墜落する危険がある（小雨と霧の中をトラクターの荷台に五六人が乗り、崖に面した石まじりの泥道斜面をでこぼこの轍の跡をたどって上ってゆく。側面は溪谷になっている箇所も多いがもちろんガードレールなどはない）。前回の調査でそのスリルを経験済みの我々は、緩やかな道を30分ばかりトラクターに乗って山中の農家にたどり着いた段階で、その先の山道は歩いて登ることにした。

しかし、二時間ほど登ったところで、山上から歩いて降りて来た家族風の数人の王母洞参拝客（前日に廟に参拝して宿泊し下って来たところであったようである）と出会い、この先の様子を尋ねたところ、膝から下が泥まみれの姿を

指差しつつ、この先の山道は雨で泥濘と化しており、廟まで歩くとたっぷり二時間くらいはかかると教えてくれた。それでは調査時間が不足すると判断し、文物管理局の同行者に相談して、再度トラクターを呼んでもらうことにした。特に危険な難所だけはトラクターを降りる算段であったが、エンジンの調子よかったのと、運転手の熟練した運転技術のおかげで、タイヤが泥に埋まってしまうような難所もクリアしてそのまま登りきることができた。



注1…食堂には参拝を終えてこれから下山するという中国人の先客二人がいたので話をすると、彼らは地元人間ではない会社経営者で、自分でランドクルーザーを運転して来たという。危なくないか、と聞くと「すごく危ない」「でも大丈夫」という返答で、下りも運転して帰るということであった。

注2…2007年に王母洞を訪れた際に聞いた話では、参拝者には女性が多く、祭礼の日などはかなりの数で賑わうとのことであった。今回のように雨天でも参拝者がいることや廟や周辺の建物が着々と整備されていることから見て、信仰は拡大しつつあるようである。

王母洞の廟付近まで登ると視界が開け、山腹の広い場所に出る。そこに農家が旅館を営んでおり、五人程度が横になれる大きなベッドが二台と、四角いテーブルがあって、食事と宿泊が可能であった*¹。



注文を受けて粉から製麺してくれた蕃茄煎蛋麺で昼食を済ませ、山腹に立ち並ぶ廟の建物を見学した。ここまでずっと濃霧であったが、この頃から時おり晴れ間が見えるようになった。2007年の調査時にはまだ建設が始まったばかりであった新しい建物がだいぶ完成していたが、整備はまだ継続中のようであった*²。

玉皇殿、三母殿などの建物を通過して上へ登ってゆくと、U字型にへこんだ溪谷に出る。切り立った崖が二段階になっている。下段壁面にある洞窟は入り口が封鎖され（昔は入ることができたが深く危険なために封鎖されたとのこと）赤い布と提灯がかけられ、焼香の形跡があった。上段壁面には王母（王母娘娘）を祀る建物*³があり、その背後頭上に王母洞がある。

注3…窓に「斗牛宮」の文字と寄付者名を記した石板が立てかけてあったが、名称は未確認。



右奥に見えるのが
王母洞



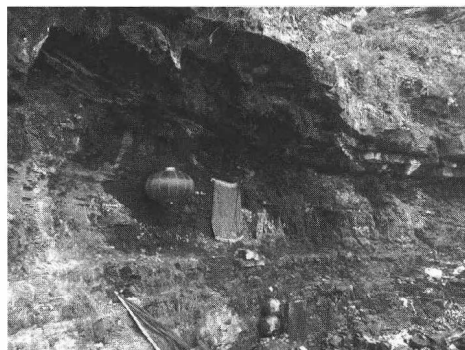
(左)三母殿内部の「国
母」像



(右)王母洞のある崖。
建物の背後に洞口が
ある。



(左)王母洞の洞口



(右)王母洞の下の花
蓮洞の洞口あと。石
板で封じられている。

王母を祀る建物の脇に石碑が置かれ、その数メートル上に登ったところが王母洞の入り口である。

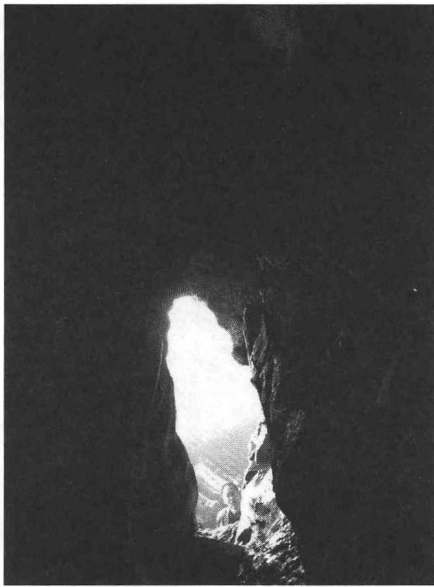
王母洞の狭い入り口から順番に中に入り、天井は高いが幅は狭い空間（足元にいくらか水がたまっている）を10メートルばかり進むと、大人がかがんで通れる程度、さらに這いつくばってようやく通り抜けられる程度に洞窟が狭ま

る。大柄な者が無理に入ると出て来るのに難儀しそうな狭さだが、小柄な森瑞枝氏が懐中電灯とともに通り抜け、奥まで進むことができた。奥は広がっていて、立って歩ける高さであり、足元に水がたまっている。左方向へ進むことができるが、3メートルばかりで突き当たり、そこから右方向にさらに洞窟は続く。しかし突き当たりの前あたりから先は水没していて進めなかった。地元の人によれば、水没している洞窟の地点は潜水する必要があるが、春には水がひき、歩いて入ったことがあるという。水没地点の先は80メートルばかりあり、奥は部屋のように広がっているとのことであった。

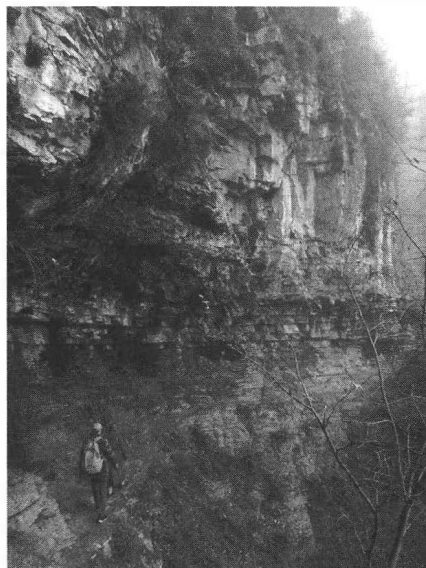
王母洞の東に隣接する霊山峰の上に、霊山洞がある。^{*4}

注4…文物局で入手した資料によれば、王母洞は「垂簪峰」に、霊山洞はその東に隣接する「霊山峰」に位置し、両者を一括して王屋洞と呼ぶ、という。

中国の「百度」の王屋山の解説ページ <http://baike.baidu.com/view/31568.htm> や、旅行案内サイト「南北游」の王屋山のページ <http://www.nanbeiyou.com/Scenery/17682> などの記載によれば、「王母洞」（およびその廟）は「玉簪山」に位置し、周囲の多くの洞窟や上に位置する「霊山洞」と通じている、とある。



洞内から入り口を見たところ



(左) 霊山の山下の崖と山道
(右) 霊山のようす



山腹にそって王母洞から東に迂回し、東側の尾根に至ったら尾根沿いに山上へ1時間ほど登る。切り立った崖につくので、崖まで岩場を手足で登攀するが、危険な地点はわずかである。

登ってゆく途中に城隍廟があるが、あまり整備はされていない。

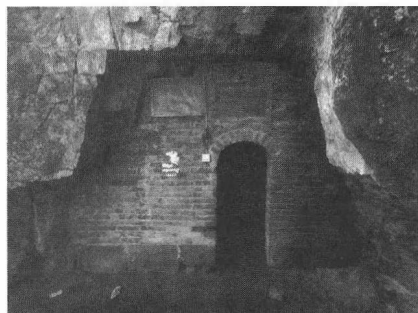
そこからさらに登ってゆくと、レンガ造りの門の遺跡を通る。^{*5}

山頂部の崖に靈山洞がある。五つの洞口があり、どこから入っても中は人が歩ける程度の高さの通路でつながっており、ところどころにやや広めの空間がある。人口掘削が加わっている可能性もあるが、基本的には天然の洞窟のようなものである。崖面に東向きの四つの洞口(「洞天門」「九天門」、山門、無名洞門)が並び、反対側には西向きに一つ洞口(「柴竇門」)がある。「洞天門」「九天門」「柴竇門」はレンガで加工・装飾され、その名を刻した門額を有する。九天門の右側に明・嘉静二十五年(1546年)の日付を持つ石碑(「周王府令旨碑」)があり、これらは明代の建築遺跡であるらしい。「柴竇門」に出る手前の洞内の床には「無底洞」という深い縦穴が開いており、王母洞へ通じているということであったが、危険なため石や木材でふさがれている。^{*6} 王母洞の名のとおり、洞内にはもともと西王母の像が祀られていたらしいが、現在は無生老母が祀られている。^{*7}

注5…案内者によれば隋唐代の遺跡だというが詳細は不明。

注6…現調査段階では、本当に通じているのかどうかは不明である。

注7…『洞天福地研究』本号掲載の山下一夫論文を参照のこと。



(左)「洞天門」(東向き)
(右)洞内ようす



(左)「九天門」(西向き)
(右)「柴竇門」

靈山洞に登って来る途中は濃い霧が出ていたが、奥の洞窟を向こうに抜けることができ、狭い洞口を出ると人がかろうじて立てる程度の広さはあるがその下は切り立った崖になっていてきわめて危険である。そこから周囲を眺めていると幸いにも晴れ間が出てきて、南西方向に天壇山を眺めることができた。

(左)はるかに天壇山がみえる
(右)靈山洞の東の景観

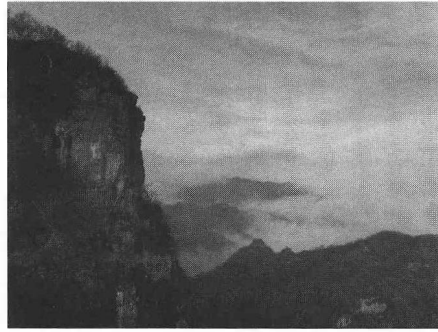
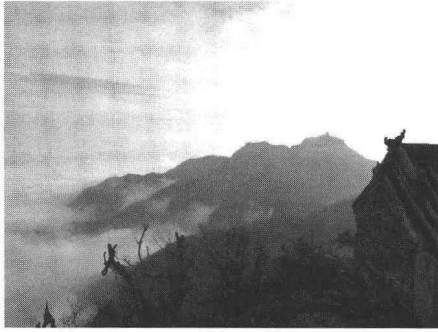


(左)天壇山
(右)五祖廟



(左)五祖廟の神像
(右)靈山から南へ開ける景観





(左) 五祖廟背後から天壇山の眺望

(右) 靈山北側の眺望

「九天門」(東向き)の反対側の「柴竇門」(西向き)から出ると、そこからさらに崖の上に登ることができ、そこに五祖廟がある。

4 「第一洞天」の構造

今回の調査によって明らかになったのは、「第一洞天」としての王屋山の構造は、ある特定の洞窟を「洞天」と考えるのにとどまらず、天壇(天壇峰)・王母洞(垂簷峰)・靈山洞(靈山峰)といった複数の峰・洞窟が大規模な空間的配置の中で一体的に機能するものとして考察することの必要・有効性である。以下に、筆者の考える概略を示す。

- ① 王屋山の主峰である天壇峰は、陽台観など大規模な道観や司馬承禎ゆかりの遺跡を有し、王朝の政治権力とも密接な関係を有する実践的活動の中心としての「洞天」であるといえよう。^{*8}
- ② 王母洞(垂簷峰)と靈山洞(靈山峰)は、至近距離で隣接した位置にあり、靈山洞内の無底洞は王母洞に通じていると信じられている。したがって、地理的な実感の上でも、信仰観念の上でも、王母洞と靈山洞は一体のものと見なされていると考えてよいであろう。
- ③ 靈山洞のある靈山峰の山頂からは、王屋山の全景が眺められる。^{*9} 山峰の連なりが馬蹄形に広がっている中心に突き出る格好で靈山洞が位置しており、眼下に王母洞の廟建築群、南西に天壇峰を遠望することができる。霧が出やすい環境でもあり、天の日月星辰と空を流れる雲と山間に湧き立つ雲海を一望に収める雄大な空間は、そこに立つ者に仙界を体感させるに十分な風格をそなえている。王屋山の「第一洞天」の宗教的空間は、天壇(①)と靈山洞+王母洞(②)の全体から成る巨大な広がりをも有し、その空間における聖なる気の流れは霧や雲の流れとして可視化される。「洞天」信仰は天に通じる山岳洞窟の信仰であることから考えると、より天に近い高い位置から天壇を含む王

注8…これまでの我々の調査では、天壇峰には「洞天」信仰の発祥となるような(地元の信徒が集まって何らかの儀礼をすることができるような)洞窟は見つけられていないが、引き続き詳しい調査と研究を継続する必要がある。

注9…王母洞からの眺望の詳細は、悪天候のため未確認であるが、上述のように、王母洞と靈山洞は、天壇と対置した文脈上では、ほぼ一体のものと見なしてよいと思われる。

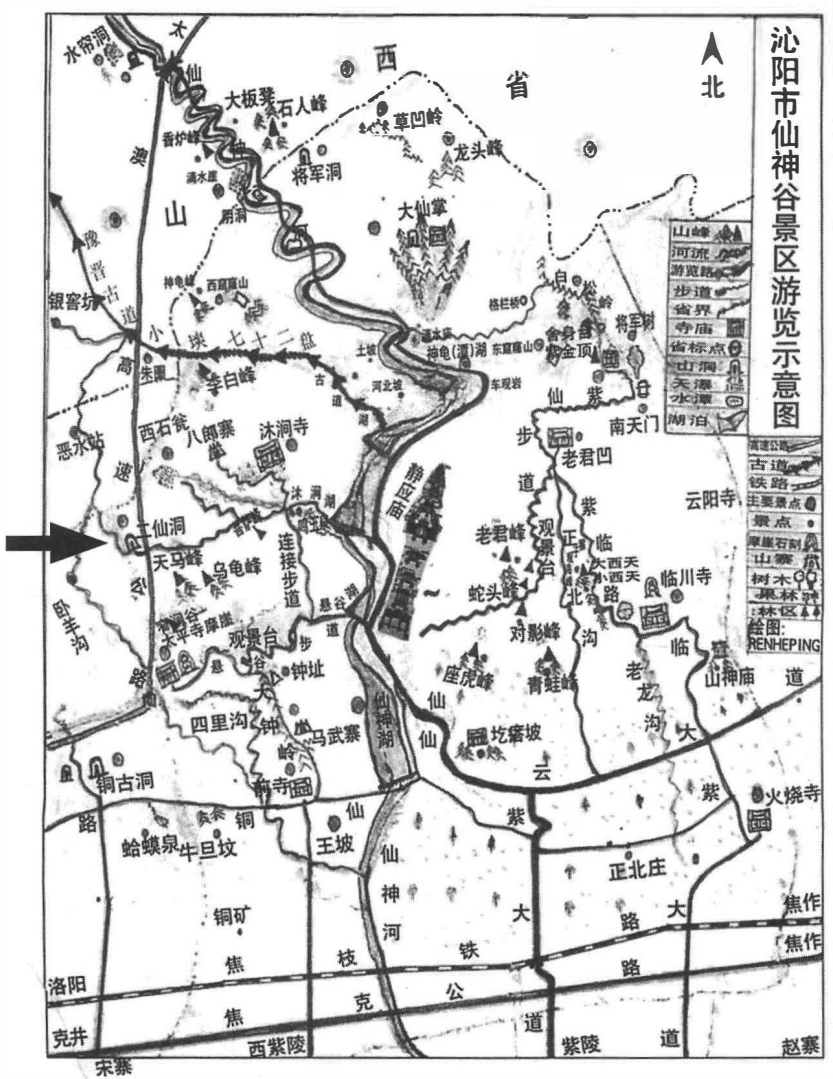
注 10…ここに提示したような構造の形成過程を具体的に明らかにすることは、これからの課題である。洞天信仰がいつ頃どのように形成されていき（西晋における王屋山への信仰・東晋～六朝にかけての魏夫人信仰や上清經典の形成・隋唐における「洞天」信仰の体系化）、また唐代に確立した「洞天」体系が発祥地であるはずの王屋山や近隣地域にどのような影響を与え変容をもたらしたかについてのより詳しい考察が必要である。

注 11…2011 年 8 月に土屋・大形・山下が静應廟（二仙廟）を調査した際、道士から修仙洞の存在を教えられたが、そのときは雨天のため登ることができなかった。

屋山の諸峰・諸洞窟を見はるかすことになる靈山洞・王母洞は、巨大な宗教的空間としての「第一洞天」の構造の中で、天壇峰よりも格上の位置づけをされている可能性があるだろう。* 10

5 静應廟・木澗寺・修仙洞の状況

11 月 5 日、沁陽市仙神谷風景区二仙廟管理処の任和平氏の案内で、修仙洞（二仙洞）・木澗寺（勝果禪院）・静應廟（二仙廟・仙神廟）の調査をおこなった。* 11 任和平氏は、周辺地域をくまなく歩いて調査している郷土史研究者で、周囲からは「歩く地図」と呼ばれているという。『太行奇観（第一輯）』（主編：任和平、中国道教協会魏華存研究院・沁陽市民間文芸家協会・沁陽市仙神谷風



『太行奇観（第一輯）』より「二仙洞」とあるのが修仙洞の位置。

景区合編、宣伝用内部資料）には、周辺地図および地域伝承や碑文などの資料が載せられている。

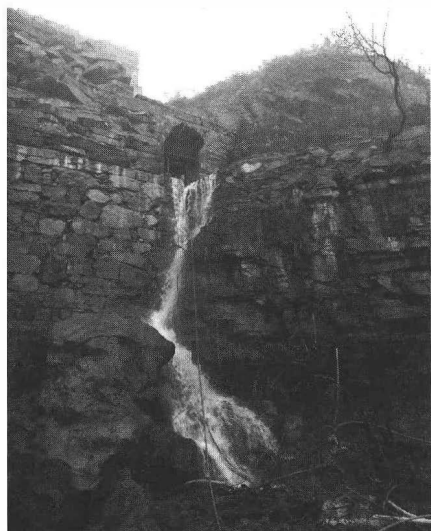


沁阳市仙神谷风景区静应庙鸟瞰效果图

木澗寺（勝果禅院）には、魏夫人を崇敬する人々による唐代の石碑がかつて存在し、*¹² 静應廟（二仙廟）は李世民によって創建されたと伝承されている。修仙洞（二仙洞）も、魏夫人が修行した洞窟とされており、現在も信者が訪れている。唐碑の記録から、隋から初唐にかけてこの地に魏夫人信仰があったことは確認できるが、修仙洞が魏夫人信仰や洞天信仰といつ頃どのように結び付いたのかについては、さらなる検討が必要である。

霧と小雨の中、まずは修仙洞（二仙洞）を目指し、仙神河をはさんで静應廟の対面側の山道を登り始めた。

注 12…この石碑については、愛宕元「南岳魏夫人信仰の変遷」（吉川忠夫編『六朝道教の研究』所収）を参照。今回の調査で確認したところ、石碑は文革で破壊・破棄されたとのことであった。（拓本是北京図書館などに所蔵）。



修仙洞へ至る山道の入り口
（水路になっている）



歩き始めの水路沿いの山道は歩きやすかったが、途中からだんだんと道が細く険しくなってくる。そのまま歩き続けると、山の崖の横に急に瓦礫だらけの広い場所が開ける。霧の中で上を見上げると、崖から崖へ高速道路の橋梁が見

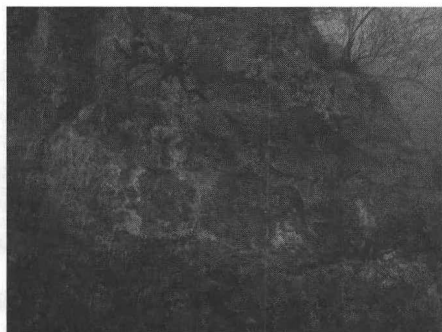
えた。瓦礫は、山の中に高速道路を通したときに岩を爆破した残骸であった。

そこから更に少し登った岸壁に、修仙洞（二仙洞）があった（ここまで二時間程度かかった）。「修仙洞」と赤く刻してある岸壁を5メートルくらい攀じ登ったところが入口である。

(左) 修仙洞のある溪谷の瓦

礫の山

(右) 修仙洞入口



洞口を入ってすぐのところに、下へ数メートル降りる急角度の木製梯子があるが、真っ暗な上に足場となる岩が濡れているので極めて危険である。先に入った任氏の注意と案内のおかげで、中へ入ることができた。梯子を降りた入口付近には神像が祀られているが、赤い布で姿は隠されている。

そこから奥へ続いてゆく洞内は完全に真っ暗である。懐中電灯で照らしてみると、広い空間が広がっているが天井から落盤した巨大な岩がごろごろしている。観光開発されていない生の鍾乳洞であるが、一部の鍾乳石は持ち去られている。

濡れた大岩を昇り降りしたり、狭い部分を通過しながら30メートルばかり奥へ進むと、狭い通路部分に石碑があり、そこを抜けると高さが10メートル以上ありそうな巨大なドーム状の空間に出る。当然ながら真っ暗であり、空気

内部から入口を見たところ

修仙洞（二仙洞）の入口



はひんやりしている。入口からは想像できないような広い空間であるため大人数の集会が可能であり、また暗闇の中で非日常的な聖性を感じられる場所である。懐中電灯で確認すると、奥の正面の下から数メートルのところに、壇が設置されて小さな魏夫人の像が祀られていた（普段は黄色い布で姿が隠されている）。*¹³ 壇は手入れが行き届き、供え物と焼香の跡があった。この地の魏夫人信仰の中心は静應廟であろうが、熱心な一部信徒は山道を修仙洞まで登り、真っ暗で危険な洞内を移動してここまで参拝に来るようである。

注 13…正面にはもともとは魏夫人の摩崖石像があったというが、現在はそれらしき下半身と頭部の痕跡しかない。



(左) 修仙洞内の石碑状の壁面



修仙洞内の魏夫人の像



(左) 木洞寺

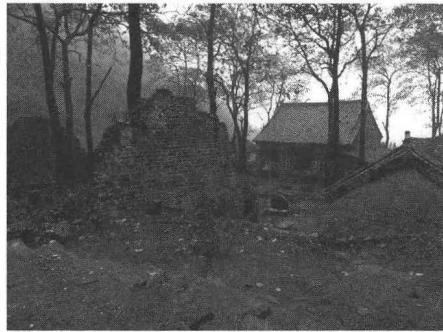
(左)木澗寺境内

(右)老母殿



(左)水道の遺跡*¹⁵

(右)木澗寺境内から門の方
を見たところ。



(左)本殿の廃墟

(右)国母殿



注14…寺院建築は、日中戦争の戦火で破壊されたとのことであった。

注15…明代のものだとのことであった。

注16…地元の絵の得意な少女が描いたとのことである。

注17…静應廟（二仙廟）は老君がこの大岩を投げ落としたとされる山の方から流れてくる河川（仙神河）のほとりにある。大岩は山から転がってきたというよりも、氷河期に運ばれてきた可能性が高いのではないと思われる。

修仙洞から麓へ戻り、木澗寺（勝果禅院）の調査をおこなった。先述のように、ここにはかつてこの地における魏夫人信仰の隆盛を示す唐代の石碑が存在していたのであるが、残念ながら文化大革命中に破壊・廃棄されてしまったとのことであった。かつての仏教寺院建築は荒れ果てているが、*¹⁴ 現在は敷地内に「老母殿」「老君殿」「三皇殿」「国母殿」などの道教系民間信仰の質素な建物が存在している。

麓まで下り、静應廟（二仙廟）を訪れた。静應廟（二仙廟）は、唐の李世民が建国の戦いにおける危機を魏夫人に救われたことに感謝して建築したと伝承される道観であるが、現在の建築は近年に復興されたものである。魏夫人・老君・李世民に関する地元の伝説を描いた壁画*¹⁶、「紫虚元君殿」などの建築、老君が魏夫人を試すために山上から飛ばしたのを魏夫人が超能力で真っ二つに割ったという大岩（「飛来石」）*¹⁷（上に「梳妆台」が建てられている）などが存在し、熱心な信仰を集めているようである。



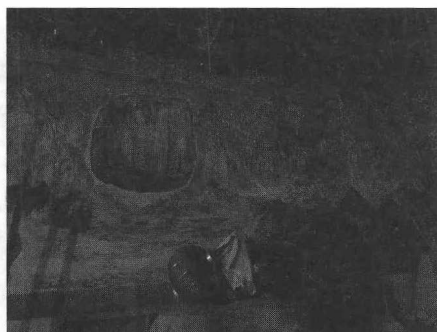
(左)静応廟山門

(右)境内



(左)戯台

(右)本殿



(左)李世民と魏夫人

(右)「飛来石」を飛ばす老君



(左)「飛来石」を割る魏夫人

(右)飛来石と梳妝台

6 考察

仙界へ通じる山岳洞窟としての「洞天」の信仰は、大まかに

- ① 何らかの形で王屋山周辺に発祥し、
- ② 魏夫人およびその信徒集団の南方への移動（晋の南遷）を契機に、（故地である王屋山への望郷を保存しつつ）江南の諸山を含む形で形成され（『真誥』所収の記述など）、
- ③ 唐代に司馬承禎によって（唐の皇帝の全国支配の確立と対応する形で）十大洞天・三十六小洞天・七十二福地として体系化された。

注 18…鈴木健郎「洞天の基礎的考察」（田中文雄／テリー・クリーマン編『道教と共生思想』大河書房所収）を参照。

ものと考えられる。^{* 18} 内伝系の文献の記述によれば、魏夫人は修武に住んでいた人物であり、王屋山で修行して王褒から伝授を受けて成道したとされている。修武は王屋山のある济源から 100km 程度であり、その中間に静應廟・木澗寺・修仙洞のある沁陽が位置する。

王屋山（济源）--- 約 50km --- 静應廟・木澗寺・修仙洞（沁陽）--- 約 50km ---（修武）

この位置関係から見れば、これらの地域の間には連絡があるのは自然であり、洞天信仰と魏夫人信仰の形成や広がりには河南省のこの地域の密接な交流の観点から考えられなければならない。しかし、「洞天」の信仰が、王屋山という範囲を超えて拡大するのは晋の南遷・魏夫人とその信徒集団の江南への移住の後であり、その体系が完成し国家の政策と結び付くのは唐の司馬承禎以降である。

したがって、静應廟・木澗寺・修仙洞などにおける魏夫人や洞天に関する信仰の形成については（王屋山の洞天信仰の形成過程の問題と同様に）、

- ① 魏夫人が修武で活動していた西晋期の影響
- ② 六朝期に形成された上清系の教説の影響
- ③ 唐の皇室の崇道政策や司馬承禎の洞天説の影響

注 19…前掲の愛宕論文に、唐代の魏夫人信仰と則天武后の政策の関係について言及がある。

などについて多層的に考察する必要がある。^{* 19} 引き続き調査と考察をおこなう際の課題としたい。

王屋山靈山洞見取図
(『王屋山志』1996年10月、
中州古籍出版社)

